

NCS

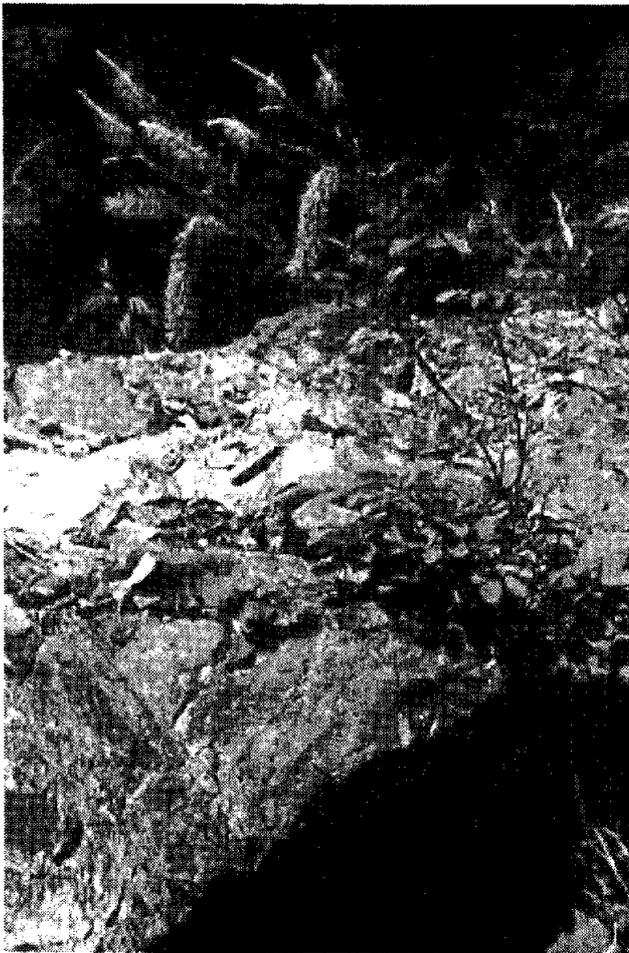
Nature Conservation
Society of Hokkaido

HOKKAIDO

2003年 3 月 NO.118

..... CONTENTS

チヨットひとこと.....	後藤 言行.....	2
会長挨拶.....	俵 浩三.....	3
日高横断道路と政策評価の課題		
	畠山 武道.....	4
提 言.....	佐藤 謙.....	5
各地のニュース.....		6
あ・ら・か・る・と.....		8
寄贈図書・お知らせ		
活動日誌・要望書.....		9
お知らせコーナー.....		10



溪谷に生育する日高山脈の固有植物エゾトウウチソウ

理性と感性のはざま

40年も前に岩波新書で読んだ造山運動の舞台として知ってはいたが、登ったのは勿論、行ったことさえなかった。それが“日高横断道路建設反対”の運動に関わるようになったのは、「ムダな公共事業、しかも自然破壊への税金投入は許せない」の思いからであった。いわば理屈から入ったのである。昨年8月、3年ほど閉鎖されていたゲートを開けて、高見ダムの上流に初めて調査団が入った折に、偶然同行する機会を得て千石トンネルの入口まで行くことができた。天気は晴。霧も出ず、谷筋の限られた視角からではあったが、日高のすばらしい自然と痛々しく傷つけられた姿を見ることができた。日高を語る時の、山男たちの瞳の輝きと怒りの心を、その時、感性でも理解することができた。



理屈が充分解らないと腰を上げない、という行動様式が身につけてしまっているが、感性を軽視しているつもりはない。理性へ、更に行動への出発点として感性は重要だと思うからだ。だから実業高校の理科教師として赴任してから、もう十数年間も“野外観察を中心とする授業”を実施してきた。テレビのお陰で、熱帯から極地までの“珍しい自然”は知っていても、自然の営みを本当に知っているとは思えないし、まずナマの自然に接して感性を磨いてほしかったからである。“自然

に感動する眼を育てたい”のスローガンで始まったこの授業では次のような獲得目標を定めた。「①生徒諸君が身近な自然を自分の五感でとらえ、②新たな発見で得られる感動をバネにして、③自然に対する科学的認識を身につけ、④自然の一部としての自分自身を、自然をいとおしみ、大切に地球人へと育てあげる」。

感性を揺さぶって理性への道をつけようと試みたこの授業は概ね好感を持って迎えられた。感想文に曰く、「よくテレビで『天気が良いから野外授業だ』と言って生徒をつれ出し、『これは何々という花だ』などとやっているのを見て、こんな学校や教師なんて絶対あるはずがないと思っていたのに」「いつも葉を摘む庭のアオジソの茎が四角いことに気づかなかった私…」「アスファルトを割って出ている草を見て、生きることにいいかげんな自分を恥かしく思った」「自然を大切にすると自分の心も豊かになってゆくとします」。彼女たち(95%以上が女生徒です)の大部分は、この程度までは書いてくれる。しかし、「環境問題にはとても興味があるので、将来的には自然保護運動に進んで参加できる大人になれたらいいなと思っています」と書いてくれる生徒は稀有な存在である。

感性と理性のズレ。理解と行動のギャップ。建前と現実生活の乖離。多くの研究者の指摘する通り、感性でとらえられた自然に対する感動は、自然科学教育の重要な第一歩として位置づけられており、科学的認識の形成に極めて有効に働き得る。しかし、感動がストレートに科学的認識に結びつくものではないことは自明で、それらを繋ぐ“何か”を見つけなくてはならない。教師としてそれを明確にできないままに定年を迎えなければならない腑甲斐なさを頓に感じる日々である。

(小樽市在住)

後藤 言行

北海道知事が日高横断道路「凍結」を表明 —皆さまのご支援、ありがとうございました—

会 長 ・ 俵 浩 三

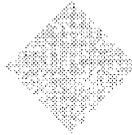
さる2月7日、堀達也知事が日高横断道路建設について、「当分、新規の工事は行わない」と正式表明しました。これはいわゆる凍結ですが、「当分」というのはあいまいな表現で、「再開」の選択肢が含まれています。だから「最低の合格点」です。私たちはこれを事実上の中止と受けとめ、再開されることのないよう、厳しく監視をつづけなければならないと思います。

現在進行中の公共事業を、行政が自ら否定するのはきわめて困難です。日高横断道路の必要性・妥当性・優先性は、客観的に見てほとんどありません。私たちは知事との8回におよぶ文書での質疑応答を通じ、日高横断道路の目的・必要性・効果が破綻したことを明らかにし、知事が答えに窮し、説明できなくなるまで追いつめました。知事から諮問を受けた政策評価委員会も、「必要性・妥当性・優先性が低下した」と答申しました。それにもかかわらず知事は、「必要性・妥当性は変わらない」と強弁しています。ただ財政事情が厳しく「優先性が低下した」ので、凍結するというのです。

もし行政が自ら必要性・妥当性を否定すれば、いま実行中の予算〇〇億円は無駄遣いと批判されるため、メンツにかけても必要性・妥当性は変わらないと強弁するのです。しかし財政事情がいくら厳しくても、もし私たちの反対運動がなければ、数ある公共事業の中から、日高横断道路ひとつだけが凍結されるということはなかった筈です。

日本一の原始境・日高山脈の心臓部を貫通する予定だった道路を、事実上のストップに追いこんだことは、北海道のみならず、日本の自然保護にとって大きな意義のあることです。今後は北海道開発局による事業再評価が引き続き行われ、さらに21世紀の日高山脈の自然環境はいかにあるべきか、という道民本位のコンセンサスづくりなどの課題は残りますが、「最低の合格点」でも日高横断道路の建設を凍結させたことは、一定の成果です。

多くの皆さまからご支援いただいたことを感謝いたします。ありがとうございました。



日高横断道路と政策評価の課題

島山 武道

激しい議論がたたかわされてきた日高横断道路問題について、北海道の政策評価委員会は、「当分、新規の改良工事は行わない」という北海道側の提案を了承し、堀知事はその旨を正式に表明することで、一応、決着がついた。長良川河口堰のときは、建設省・通産省（当時）の官僚が、規模縮小を訴える地元三重県の担当者（部長）を怒鳴りつけ、工事を強行したが、昨今の公共事業をめぐる状況を考えると、地元自治体が断っている道路工事を国が続行するのは、事実上不可能といってよいだろう。

終わりをければすべて良しで、一見落着くという気もするが、今回の政策評価を通して、政策評価制度のもっているいろいろの問題が、明らかになってきた。第1は、時間のなさである。限られた時間内で、簡単な資料を見せられ、結論を出せといわれても、どだい無理な話である。今回は、特定政策評価ということで案件が1件であったが、一般の政策評価になると、案件が20件も30件もあり、それを2-3回の委員会でこなすことは不可能である。

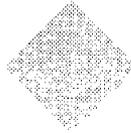
第2は、評価委員の能力の問題である。個々の評価委員は、その分野では有能な専門家であるが、すこし専門分野をはずれると、的確な意見をいうのは極めて難しい。これは委員の資質・能力の問題ではなく、システムの問題である。

第3に、全国の例をみると、政策評価・事業評価の対象となる事業は、5年ごと、10年ごとという形式的な基準により選択されるが、数が多いときは、審議の対象となる事業を選択する。その選択が事務局まかせであり、おかしな事業でも現在進行中のものは、「円滑に実施中」ということで対象外で、委員会の審議に上がってこない。結局、審議の対象となるのは、工事費の膨張や地権者の反対で役所がもてあましていような焦げ付き事業ということになる。現在進行中の事業を、委員会の意見で中止させることは、まず不可能と考えるべきである（なお、中止・続行の最終決定者は知事である）。

では、政策評価には何の効用も期待できないのか。私は、いろいろ問題はあがるが、行政評価・事業評価は、行政官にコスト意識をもたせ、政策立案や実施のプロセスを論理化し、真に必要な情報を取捨選択し、結果について説明する責任を自覚させるのに、長期的には役立つと思う。

しかし、短期的には、政策評価が住民に有益な情報をもたらす、住民参加を促す効果に期待すべきであろう。一般的な情報公開手続によっても有益な情報を得ることは可能であるが、事業評価においては、分野毎に事業が分類整理され、相互に比較可能な形で提示される。また、政策委員会の傍聴や議事録の閲覧などによって事業の必要・規模・停滞している事情などをある程度知ることもしよう。行政評価・事業評価を、行政の外部の者が行政監視のためのツールとして利用することが重要であると考えられる。そうすれば、今求められるのは、徹底した情報公開であろう。情報開示とセットにならない政策評価はほとんど無意味といえる。

最後に付言すると、政策評価は事業採択時（開始時）にもなされる。しかし、現状では、事業開始時評価も形式に流れ、実際的な効果は期待できない。したがって、政策評価ではなく、政策決定のプロセスに住民が関与することが一層重要である。政策評価という限られた手続ではなく、計画の初期の段階から事業内容を公開し、様々の生の意見・利害を調整するための手続（事業決定手続）を整備することが先決なのである。



いま改めて、日高山脈の自然に関する総合調査が必要である

佐藤 謙

日高横断道路は、2003年2月7日、堀達也北海道知事により「北海道担当区間の新期改築工事は行なわない」という「凍結宣言」によって、一つの転機を迎えた。北海道開発局は、すでに「北海道知事の判断を尊重して見直す」としてきたので、私たちはいま「開発局による開発道路区間の再評価」を見守る段階にある。

そもそも1979年に公表された日高横断道路に関する「事業者による環境影響評価書等」は、当時から、その重大な欠陥が多数指摘されていた。それにも関わらず、事業者は、1984年までの着工行為の中で調査を続け、最初の評価書における余りにも酷いデータの間違い部分を訂正し、「影響は少ない」という当初から変わらない結論を述べただけで、着工に走った。上記の欠陥について、筆者は、すでに当協会会誌、北海道の自然（第39号）にまとめ、今回（2003年）公表された「市民アセス」に再度まとめてきた。これら「事業者による環境影響評価書等」に対する批判は、筆者が1973年、1976-1978年および1985年に日高山脈の植物的自然と徹底して付き合ったデータ、さらに1999-2002年に約10回に及ぶ現地調査を繰り返したデータに基づいている。当方は、自然を見ていたから、自然の特徴を指摘し、事業者の欺瞞に批判できたのである。

「市民アセス」では、日高山脈の生物に関して、筆者による雑管束植物とともに、哺乳類のエゾヒグマとエゾナキウサギ、鳥類のシマフクロウなどの猛禽類、そして昆虫類の特徴がまとめられ、釣り人の立場から魚類と河川環境についても良くまとめられている。そのうち、事業者による評価書等については、植物、エゾナキウサギおよび昆虫類に関して批判されており、他の記述では評価書等に対する批判ではなく、日高山脈の生物そのものの特徴がまとめられ、我々にそれを守る義務があることが強調されている。

日高横断道路が「凍結」した後、何が必要であるのであろうか。筆者は、何よりも先に「日高山脈の自然に関する総合調査が必要である」ことを強調したい。何故ならば、第一に、日高山脈は、日本の国立公園の中では突出した面積、国立公園を併せても全国第8位の面積を有し、その原始的自然の面積は日本最大であるので、今後、国立公園、原生自然環境保全地域への指定、あるいは世界遺産への登録など、日高山脈を、自然を守る体制の中で最大限に評価すべきと考えるからである。第二に、エコツーリズムなど、原始的自然の利用が提唱されているので、最大限に評価すべき自然に対して保護と利用の程度を詳細に吟味すべきと考えるからである。第三に、道路建設工事が中断された段階では、工事が約20年にわたって自然へ影響し続けてきた現状を十分に把握する調査が必要であり、その上で、自然の回復・復元、あるいは工作物の撤去など（日下、行政が始めている自然再生事業ではない、本当の再生）を考えなければならないからである。このように、保護、利用、あるいは自然の回復・復元に関して、それらの根底では、日高山脈の自然をどの程度、細密かつ慎重に把握したのが重要である。「市民アセス」では猛禽類に関する記述においても「調査の必要性」が強調されている。自然の把握を抜きにした主張は、いずれの主張であっても「砂上の楼閣」になるに違いない。

総合調査は、市民の立場から、そして自然保護に関わる行政（環境省、林野庁、北海道環境生活部など）からも行なう必要がある。アプローチが大変な日高山脈であるが、それぞれが質の良い総合調査をして相互に照合されるのが、最良の方法であると思う。「徹底した自然の把握を先に」、そう思わざるを得ないのである。

函館市の廃棄物処理を巡って—— 中尾 繁

(南北海道自然保護協会会長)

昨年、函館市は廃棄物の処理施設建設場所を選定するための立地基準を示した。基準に含まれる15項目の内容はほぼ妥当であると思える。問題は基準を提示したその時、同時に、その基準に従って選んだとして3箇所の地区を候補地として取り上げたことである。そのうち最大の面積をもつ東山地区の住民に説明会を開いて納得を迫ったが、果たして、誰でもが容易に予想できるように議論が百出して混迷を深め、今日に至っている。

そもそも函館市で生ずる廃棄物をどうするかは、市民全体の問題であるにもかかわらず、広く市民に「自らの問題」として問いかけなかったが故に、廃棄物処理問題は東山地区住民と市環境部の小さな対立になってしまったように見える。「候補地」の是非が市議会で議論されたと聞くと、それさえも手順前後である。廃棄物の量とその処理を、他人事でなく、「自らの問題」として徹底して認識することを促すことが何よりも先決である。残念ながら、廃棄物処理に対する多くの市民の関心は極めて低いように見える。まして、正確に理解している市民がどれほどいるだろうか。

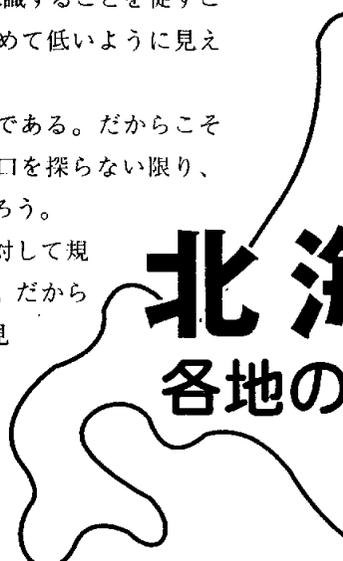
広くゴミ問題は、函館市に限らずこれからの街づくりに避けて通れない重要課題である。だからこそ処理候補地を拙速に決めるのではなく、市民みんながつけを負担する覚悟で解決の糸口を探らない限り、「立地基準を満たすから東山地区」、では地区住民に納得してもらうことは難しいだろう。

候補地選定を急ぐ行政側にも、このままでは提出が予想される廃棄物処理申請に対して規制をかけることができず、むしろ野放図な状態を助長しかねないとの心配もあろう。だからといって、いきなり一部の住民に犠牲を強いるのではなく、手順を踏んで、将来を見据えた解決策を示す努力がなければ、結局のところ一時凌ぎの対策と映りかねないし、立地基準が「東山地区ありき」で考えられたのではないか、という住民の疑念を払拭することも出来ないだろう。

すでに述べたように、手順の最も重要なポイントは、廃棄物処理をどれだけ「自らの問題」として認識し、その解決がこれからの自分たちの生活にどれほど重要な課題であるかを、市民全体が共有することである。そして自分たちが生み出す廃棄物の処理に市民みんなが注意を向け、具体的にどうするかを考えることが手順の第一歩で、けっして一部の地区住民だけが悩む問題ではない。行政はそのための情報（立地基準を含めて）を市民に提示して議論を深める必要があるだろう。

不法投棄についても一言触れておきたい。市内の山間地や河川上流域の人目につかない場所には、目に余る不法投棄がされている。廃棄物処理業者による大々的な不法投棄も明らかになった。業者に対する法規制の強化が考えられているが、一部の市民の不心得に対しても、モラルの低さに暗澹たる思いを抱くだけでなく、何らかの解決策を見いださなければならない。そのような対策に頭を悩ます現状も、実は廃棄物処理問題の一方の現実である。みんなが現実を知って、声にする行動が求められる。

(函館市在住)



北海道各地の

削られる海岸

大館 和広
(理事)

各地で海岸浸食が深刻だ。

海岸地形というのは、自然が気の遠くなるような年月をかけて作り上げて来たものだと思う。それが人間の経済活動によって短期間に変化させられてきている。

私のフィールドであるコムケ海岸も危機的な状況にある。20年前と比べると、これが同じ場所なのか、と信じられないくらいに砂浜が痩せて後退し、むき出しになった後背の土地を時化の度に波が削っている。一部の道路は崩落し2年前から通行止めになったままだ。土木現業所では浸食のひどい部分の海岸に波消堤を作っているが、今度はその先が削られるという悪循環になっている。

コムケ海岸が浸食する以前には、紋別港寄りの海岸が浸食されていた。ガンコウランの生育する丘も浸食による崩落で危機的な状況だ。海岸に沿ってあった道路も消滅した。

海岸浸食の原因は単一ではなく、いろいろな要素が絡み合っているのだろう。行政は認めたがらないが、ひとつには港湾の拡大があるのは間違いないだろう。これはコムケ海岸だけの話ではなく、何処でも実際に見ることのできる話である。新年早々の新聞でも小樽ドリームビーチが10メートルも浸食されていると報道され、原因は石狩湾新港の拡大ではないかとされていた。

更に原因を求めるとすれば地球温暖化があげられるだろうか。オホーツク海岸では冬に流氷が接岸し、これが天然の防波堤となり冬期の浸食は起こりにくい。しかし近年は流氷が接岸している期間が短く、冬も波浪にさらされる。

行政には、小手先の対策ではなく、しっかりと原因究明をしてもらいたい。その上で効果のある対策を立ててもらいたい。このままだと、CMのように砂浜を知らない子供たちが現実のものとなる。そうならないよう、協会からの発信を続けたい。
(紋別市在住)

道北 ニュース

野付半島へのご案内

森田 正治
(理事)

流氷と言うと紋別や網走を連想される方が多いが、野付半島もスポットの一つである。オホーツク海の流氷は根室海峡を南下するが、16キロほどの狭い野付水道でのながめも迫力がある。今年の野付半島での、「流氷初日」は1月16日で、例年より10日ほど早いとのこと。

野付半島は、全長28キロの日本で一番長い砂の半島(砂嘴)。「野付」とはアイヌ語の「ノツケウ(あご骨、岬の意)」に由来しエビ状になっている。

年々、半島の先端部は伸びているものの、海岸線は浸食されテトラポットが並んでいる。かつては、トドマツやミズナラの森林だったが、地盤沈下と海水浸透により、現在のトドワラ、ナラワラが出来た。

かつての帆船の時代、厚岸が都会で、そこから根室半島をぐるりと回って国後へ行くより、風連湖と野付崎を経由した方が近道であった。野付半島は、千島への中継地として、鯨漁場として街が形成され、「キラク」と呼ばれ栄えていたと言う。

花は、気候が冷涼なこともあり8月に入っても観察できる。センダイハギ、エゾカンゾウ、ハマナス、ヒオウギアヤメ、ワタスゲ、ハマフウロなどの群生地がある。また、チシマフウロ、シコタンキンポウゲなど千島系の花も多く見られ、タンポポの大半は、セイヨウタンポポでも、エゾタンポポでもなく、シコタンタンポポが頑張っている。

夏には、タンチョウやオジロワシの大型鳥のペアに出会うこともでき、アカアシシギの国内唯一の繁殖地でもある。秋には、数千羽のクマガリが飛来するなど、二百数十種を観察できる野鳥の宝庫でもある。

夏、観光船で野付湾内を遊覧すると数十頭のゴマフアザラシに会うことが出来る。また、根室海峡では、ホエール・ウォッチングもでき、陸からの観察も可能。お花島でキタキツネの親子に遭うことが出来るかも。

昨年の春、その野付半島にネイチャーセンターがオープンした。館内の展示は、まだまだ不十分だが、二年目からは観察会等も含めユニークな企画を予定している。道東へおいでの際は、是非、足をのばしていただければ。
(中標津町在住)

市民による日高横断道路『時のアセス』

NC編集部

日高横断道路の凍結に関して、当協会会長から多くの皆さまからのご支援に感謝を申し上げたところですが、ここに、それに関連する一冊の新刊図書を紹介いたします。

当協会が参加している「『止めよう日高横断道路』全国連絡会調査部」は、(財)自然保護助成基金(プロナツラ)の補助を受けて、「市民による日高横断道路『時のアセス』」を作成しました。すでに、昨年12月2日、日高横断道路を審議していた北海道特定政策評価委員会に向けて、その「暫定版」が発表されましたが、今回、2月15日付けで、多くの方に読んでいただく「普及版」が印刷されました。

この市民アセスは、日高横断道路に関して「開発道路」、「自然の把握と評価」、「地元生活者や自然の利用者」、「法律」など多方面から種々の問題点をまとめておりますので、近々と予想される北海道開発局による「開発道路」の見直し(中止や凍結など)にとって、重要な基礎資料になるものと考えます。

本書はまた、「日高の自然」や「日高における自然と人との関わり」について過去から将来にかけて種々の視点がかかれておりますので、その多様な視点・見方は、今後、日高山脈の自然とどのように付き合っていくかを考える際に、大変参考になるものと考えております。例えば、国立公園の指定、世界遺産の登録、エコツーリズムなど、日高山脈の自然に関して、どのような保護と利用があるべき姿なのだろうか、その議論は、今後の私たちの課題になっていくものと思います。

さらに、本書は、氏名が示された執筆者だけではなく、多くの方の多面的な協力によって作成されております。これもまた、自然保護を求める市民運動の一つの成果と言えます。なお、本書のさらに詳しい内容紹介は、同時期に発行される当協会会誌「北海道の自然第41号」に、編集担当であった小島理事が書いております。

皆さまには、本書をぜひ手にとってみていただきたいと思います。本書を購入ご希望の方は、当協会でも以下の要領で頒布しておりますので、当協会まで連絡をください。

企画立案・編集：「止めよう日高横断道路」全国連絡会調査部

協 賛：(社)北海道自然保護協会・(財)自然保護助成基金

発 行 日：2003年2月15日

頒布価格：1,000円(郵送の場合は、別途、郵送費をいただきます)



稚内南部ウエンナイ川河川切り替え問題のその後

昨年2月、当協会は、地元ウエンナイ川を守る会の情報により、絶滅が危惧されるコモチカナヘビの生息が確認されている河川の開発を止めるため、知事宛に意見書を提出しました。2003年1月現在、宗谷支庁建設指導課は書類不備のため開発許可申請書を受理していないことがわかりました。開発業者は中止したわけではないと思われるので、引き続き監視していく必要があります。(高畑 滋)

活動日誌

2002年12月

- 5日 「日高横断道路」道民集会（札幌）
- 6日 日高横断道路工事の中止を求める署名簿提出（35,520筆）
- 7日 日高横断道路政策評価委員会（傍聴）
- 14日 第3回理事会、忘年会兼送別会
- 17日 日高横断道路政策評価委員会（傍聴）
- 26日 日高横断道路政策評価委員会（傍聴）
臨時拡大常務理事会

2003年1月

- 21日 拡大常務理事会
- 23日 日高横断道路政策評価委員会（傍聴）
- 29日 日高横断道路政策評価委員会（傍聴）
- 30日 自然保護講演会 市川 守弘
「自然保護運動の新たな発展を目指して—アメリカから学ぶ」
(かでの2・7)

2003年2月

- 5日 自然保護学校（環境サポートセンター）
「お花畑から」鮫島惇一郎
- 14日 ホームページ更新
- 15日 日高横断道路十勝シンポ（帯広）
「未来へつなごう日高山脈」
- 18日 拡大常務理事会
- 19日 自然保護学校 市川 利美
「こんなに違うアメリカの野性生物保護政策」
- 26日 自然保護学校 佐藤 光子
「自然再生推進法で自然は再生できるのか」

要望書など

■2002年11月13日

日高横断道路の「特定政策評価」に際してこの事業の妥当性・必要性などを客観的かつ厳格に審議することを求める要望ならびに意見書。

日高横断道路の特定政策評価に関する陳述書

■2002年12月28日

別寒辺牛川流域における砂防ダムの中断と今後の工事計画全体の見直しを求める要望書

■2003年1月27日

日高横断道路（道道静内中札内線）の特定政策評価に関わる緊急要望書

■2003年2月3日

日高横断道路（道道静内中札内線）に対して知事が「中止」とすることを求める緊急要望書

新会員紹介

2002・12から

【A会員】浦 舟三郎

寄付金

11月	川崎 定明	6,000円
12月	北海道花の名店会	50,000円
1月	浦 舟三郎	2,000円

* お知らせコーナー *

2003年定期総会と
公開講演会のお知らせ

2003年度通常総会と公開講演会を次の要領で開催いたします。

野外活動シーズンとかさなる時節ではありますが、万障繰り合わせてご参加くださいますようお願いいたします。

日 時：2003年5月17日（土）

午後1時から3時20分まで

場 所：かでの2・7 710号室

* 総会終了後同じ場所において一般の方々も参加した公開講演会となります。

講演会：午後3時30分から5時（3時20分受付）

演 題：「川に魚が減ったわけ——

環境改変と外来魚移植の視点から考える」

講 師：後藤 晃

（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・大学院水産科学研究科助教授）

後藤 晃 氏プロフィール

1947年大阪府生まれ

北大大学院水産研究科博士課程修了

水産学博士

著書に「川の魚たち」（中公新書、1982）、「日本の淡水魚類とその分布、変異、種分化をめぐって」（東海大学出版会、1987）など多数

講演会

「希少植物の保護について
考える」のご案内

北海道自然観察協議会主催で以下の講演会を行います。

希少植物の実質的な保護のためには、現地の状況を踏まえ過去の調査結果と比較し、どのような保護が可能か長年お考えになられてきたテーマをお話していただきます。

講 師：佐藤 謙（北海学園大学教授）

日 時：2003年4月12日（土）午後2時40分から4時30分（2時30分受付）

場 所：北海道環境サポートセンター

（札幌市北区北7条西5丁目

千代田ビル1F）

問合せ：須田 節・北海道自然観察協議会事務局
長まで（☎011-752-7217）

参加無料、申し込み不要、当日直接会場へ

協会のホームページ

<http://www.jade.dti.ne.jp/~nchokkai/>

協会では、会誌やNC（会報）の他に、ホームページでの活動報告・意見募集も行っておりますので、ぜひご覧になってください。会員の皆さんには、協会宛に直接の手紙であっても、ホームページ上の意見欄であっても、常に活発に、ご意見を寄せていただくこと願っております。

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員 4,000円

個人B会員 2,000円

（A会員と同一世帯の会員）

学生会員 2,000円

団体会員 1口 15,000円

<納入口座>

郵便振替口座 02710-7-4055

北洋銀行大通支店（普通） 0017259

北海道銀行本店（普通） 0101444

札幌銀行本店（普通） 418891

<口座名>

社団法人 北海道自然保護協会

—おわび—

前回北洋銀行大通支店・北海道本店の番号の0がひとつつけ忘れましてお詫びと訂正いたします。

※ この紙は再生紙を使用しています。

